

受講番号 18062 学校名 本山中学校 氏名 中村 美和

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 第3学年 生徒数 29 名
科目名 第3学年 単位数(授業時数) 3 時間 使用教科書名 NEW HORIZON 3

クラスの様子・特徴

学力は低くないがあまり積極的ではないため、スピーキングやリーディング、コミュニケーション活動が苦手で声が小さい。生徒は「会話ができるになりたい」「ゲームをするとき楽しい」「単語、文法、リスニングが苦手」という意見を持っている。

問題の確定

達成感や満足感の得られる授業、「語彙力」「文法力」の強化、「読むこと」「話すこと」の能力を高める授業が必要である。

予備調査

A 授業の観察

与えられた課題に対してまじめに取り組めるが、それ以上の意欲が感じられない。活動はできるだけペアで行っているが、その取り組みを工夫して持続させ、評価していくことが生徒の意欲や自信につながり、分かる、楽しい授業に近づける道になるかもしれない。

B 生徒による授業評価

毎回、その授業の理解度を図るために評価シートを書いており、1学期を振り返るためにも自己評価と授業評価を行っている。特にマイナスな意見はなかったが、項目によっては改善しなければいけない意見もあったので、それについては取り組んでいきたい。

C 学力データ

5月上旬に英検のリーディングテストをアレンジして実施した。5問中全問正解の生徒は50%であった。6月中旬に2年生の内容でCRTを実施した。観点別に見るとコミュニケーションへの関心意欲態度が全国と比べると低く、総合的には中間層が多い。

リサーチ・クエスト

単語を中心とした基礎基本の徹底を行い、できるだけペアワークを取り入れながら生徒たちにコミュニケーション活動ができる自信を持たせ、もっと大きな声で読んだり、積極的に話したりする態度を養うにはどうすればよいか。

仮説・実践・検証

仮説1

ビンゴやクロスワード、単語テストなどを行えば、自己表現活動や読みに必要な語彙力が身につく、自信を持って大きな声が出せるであろう。また、和訳を先に渡すことによって内容を理解させ繰り返し練習すれば、自信を持って大きな声で読めるであろう。

実践1

授業の始め10分間、基本的な単語10問を覚え、3日に1回確認テストを行った。覚える際にはペアになり、時間制限をしながら繰り返し問題を出し合い協力し合って覚えていった。長文の場合には和訳を先に渡して、音読練習を行った。そして英英のshadowing、英和のshadowing、ペアでイントネーションやリズムをぴったり合わせて読むなどかなりの練習量の音読練習を重ねた。

検証1

基本的な単語に取り組んだ約10分間は、英語が苦手な生徒もよく集中して取り組んでいた。少しでも自信がついた生徒が増えたと思われるが、それが自己表現活動や読みにつながり、自信を持って大きな声で読むことには至っていないようである。一斉練習の声に大きな変化はなかったが、ペア練習や個人練習はしっかり音読できていた。和訳を先に渡すことでその単元は何にポイントを置くのかをはっきりさせることで音読に集中できた。

仮説2

気持ちや情報などを伝えたいという気持ちを持たすようにペアワークなどを工夫すれば、英語を使う楽しさを感じることができ、また積極的に話したいという気持ちが高まるであろう。

実践2

各単元でできるだけペアで覚えたり、情報を交換したり、また会話ができるようにしていった。2枚のシートを使ってパートナーがそれに対して答えたり、ジェスチャーを使ってそれについてお互いが質問し合ったり、またALTに質問を作って尋ねたり、英語を使う楽しさを感じることができるような工夫をした。

検証2

英語は言語なので読んでも書いても話しても基本的に相手に伝えることを想定して、ペア形態での学習をできるだけ取り入れて授業を組み立ててみたが、英語を使う楽しさを感じることができた生徒は少なかったように思われる。パターン練習などはペアで積極的にできたが、それを使っているような表現を用いて自己表現を楽しむところまでは至らなかった。また、積極的に話したいという気持ちを持った生徒も少なかったように思われる。

仮説3

事後の評価だけではなく、事前に個別に、またはクラスの到達目標を設定すれば、目的意識を持たせることができるであろう。

実践3

毎時間、生徒は評価シートを記入し、今まで学習のポイントを書かせていた欄に到達目標を書かせ、授業が始まる時に自分がこの授業で何をするのかを明確にさせた。自分がこの授業でどうなりたいかを確認し、授業に取り組んだ。

検証3

アンケートによると毎時間の「学習のポイント」を「到達目標」に変えることによって、自分の到達点が明確になり、その学習で何ができるようになるべきか、そしてそのためにはどうしなければならないかが確認できた生徒は69%いた。3分の2の生徒は目的意識を持って授業に取り組めた。

研究の成果

成果としては、全体では大きな声で読むまでには至らなかったが、個人では積極的に読むことができ、上達した生徒が増えたことである。全体では反応がないことが多いが、ALTと個人では楽しく会話でき、ALTからの評価も高かった。ペアワークも積極的になり、お互いを高めようとする場面もあったが、ただのトレーニングになってしまうと飽きてしまう生徒がいた。自然に声を出しながら到達目標を達成させるようなしなやかな練習させたことには効果があったと思われる。ペア学習を活用しながら、生徒たちがコミュニケーション活動に自信が持てるような授業を展開させたい。

今後の授業改善の課題

生徒には大きな変化はなかったが、学んだことは自分に何か迷いがあるときは到達目標が明確ではなく、授業全体がぼやけてしまうこと、目の前にいる生徒の実態を把握し、その課題を解決するための具体的な策を立てることが不可欠なことである。「英語を使ってやってみたいこと」そんな生徒の夢を大切にしながらそれを実現させるきっかけになるような授業を目指したい。今後は4分野がリンクしている授業を展開させたい。